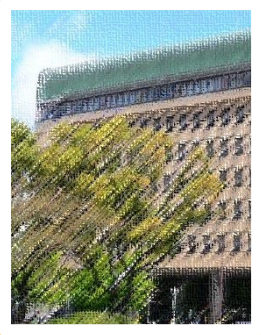


教育センターニュース



四日市市教育委員会 教育支援課
〒510-0085 四日市市諏訪町 2-2 (四日市市総合会館 6階)
TEL 354-8283 (代) FAX 359-0280

ホームページ <http://www.yokkaichi.ed.jp/e-center/>



教育支援課マスコットキャラクター しえん君

研修の秋！授業改善に取り組もう！！

木の葉も色づき始め、秋の深まりを感じる今日この頃です。校内研修においても、研修の深まりを感じてみえることと思います。秋は、各校において研究授業が多く実施されますが、その際、ぜひ、今年4月に配付した「問題解決能力向上のための授業づくりガイドブック2」をフル活用していただきたいと思います。



今夏の教職員研修講座では、ガイドブック推進協力校による実践発表があり、授業改善に向けた手立てが多数紹介されました。そこで協議された内容を含め、授業づくりのヒントをQ&Aで以下に紹介します。校内研修を活性化するため、ご活用いただければ幸いです。

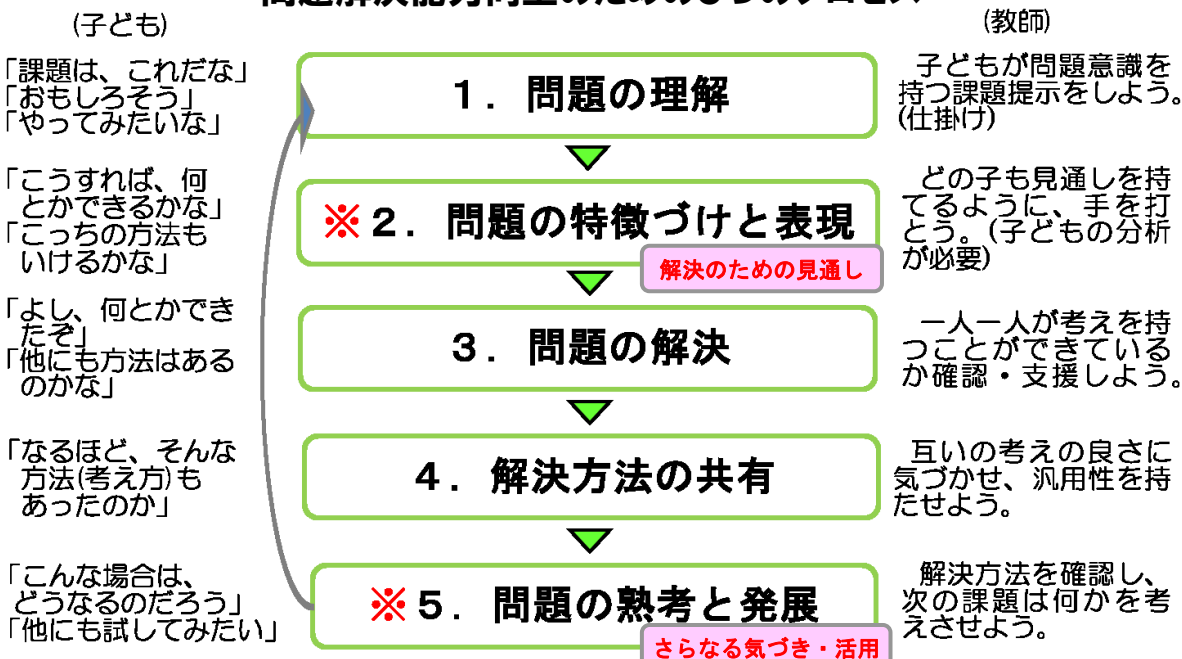
授業づくりのヒント

Q1

問題解決能力向上のための授業づくりのプロセスについて教えてください。

「四日市モデルの5つのプロセス」は、子どもの思考過程に沿って構成されています。子どもの思考過程を重視し、子どもの姿に応じて教師が適切な手立てを講じるとき、子どもたち一人一人に問題解決能力を育むことができます。

－ 四日市モデル － 問題解決能力向上のための5つのプロセス



※それぞれのプロセスに行きつ戻りつすることもあります。

〈逆算して考えよう〉

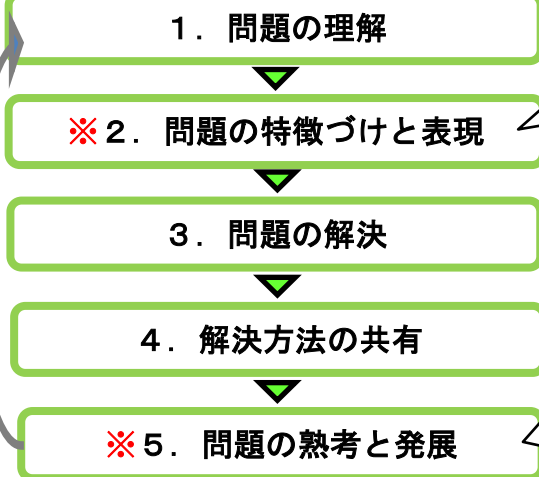
優れた実践者は、授業を山場や着地点(主に第4・第5プロセス)から逆算して考えるとされています。

例えば、第4プロセスで他者の考えを知り、「なるほど、そんな考え方もあったのか!」と、知的な感動場面を作ろうと思えば、第3プロセスで一人一人に確実に考えを持たせる必要があります。

そのためには第2プロセスで一人一人に解決のための見通しを持たせる必要があります。

そして、第1プロセスでは、子どもが問題意識を持つような魅力ある課題提示が必要となります。

Q2 なぜ、第2プロセスと第5プロセスが重要なのですか。



ここで子どもが**見通しを持つ**ことができれば、以降のプロセスにおいて、子ども自身が**主体的、協働的、探究的な学習活動**を行うことができるからです。

第1～4プロセスで学んだ**知識・技能を活用するためのプロセス**だからです。学んだだけでは、知識・技能が本当に身に付いているかどうか、わかりません。新しい解決方法を、次の問題に活用できることに気づいたり、新たな問題を発見したりすることができれば、**問題解決能力が向上してきた**と考えることができます。



Q3 「めあて」を出すタイミングが難しいのですが!?



「めあて」は、必ずしも授業の冒頭に提示しなければならぬものではありません。

子どもに**問題意識**を持たせ助走した後に、

大事なことは、**子どもに問題解決能力をつける**という視点です

子ども自身から「めあて」となる言葉を引き出せば、子どもの**問題意識が明確になり**、子ども自身の「めあて」になります。

Q4 「めあて」と「振り返り」の関係を教えてください。



「めあて」で子どもに**問題意識**を持たせることができれば…

「振り返り」は、**達成感**を伴ったものになります。

「この学習でこんなことがわかるようになった」「こんなことができるようになった」

「振り返り」は、子ども自身が**手ごたえを感じる**機会にしたいものです。

「めあて」と「振り返り」は連動しています。

Q5

「問題解決能力向上のための授業づくり」の前提となるものは、何ですか。

安心して過ごせる学級づくり、安心して話せる雰囲気づくりです。

- 笑顔が一番。笑顔は連鎖する。 …子どもは表情を気にする。
- 子どもが求めるのは、友だち先生ではなく、安心な環境を作ってくれる先生。
- 全員参加が基本。否定されない関係が保証されていることが必要。
 - ・子どもの困り感（わからない等）に寄り添う。一人一人の活躍する場をつくる。
 - ・子どもの活動量の確保。（教師が話しすぎない）
- 答えがわからなくても参加できる問いかけの工夫
 - ・わかった子だけで進めない。
 - ・結果よりも学び方を大切にする。
 - ・わかる子に「教えてあげて」より、自分でやろうとしている子に「何か困っているところがあったら、友だちに相談していいよ」と声をかける。
- 聴く姿勢をつくる。
 - ・「発言して」ではなく、「考えを聴こう」⇒「聴かせて」と言える子どもに育てる。
 - ・友だちの意見を聴くことに意味を持たせる。聴く必然性をつくる。一問一答・教師主導型からの脱却。



Q6

「四日市モデル」各プロセスのポイントを教えてください。

ガイドブック活用推進協力校の実践発表で紹介された取組を中心に、各プロセスごとのポイントを以下にご紹介します。

（取組例の抜粋であり、すべてを網羅する手立てではありません）

第1プロセス 問題の理解（問題自体を「発見」することも含む）

- 子どもが主体的に「考えたくなる」教材の特性を生かした仕掛けのある授業づくりが大切。
- 本当に解決したい問題になっているか（考えざるを得ない状況をつくる）
 - ・先に答えを示し、「どのようにすればわかる？」を問う。
 - ・情報の過不足⇒「何がわかれば、答えが出せる？」「この情報は必要なの？」
- 「なぜ？」を問い、根拠や原因を深く考えられるようにする。
- 「工夫して～しよう」と呼びかけ、創作や実践を促す。
- 「～を活用して」と条件を付加し、知識・技能の活用を進める。
- 「～を発見しよう」と謎解きを促す。
- 「～を説明しよう」と促し、論理的説明力を育てる。
- 「グループで協力して」など協働的な学びを促す。
- 「資料を引用しながら」と資料活用を促す。
- 「～と～を比較して」と比較思考を促す。

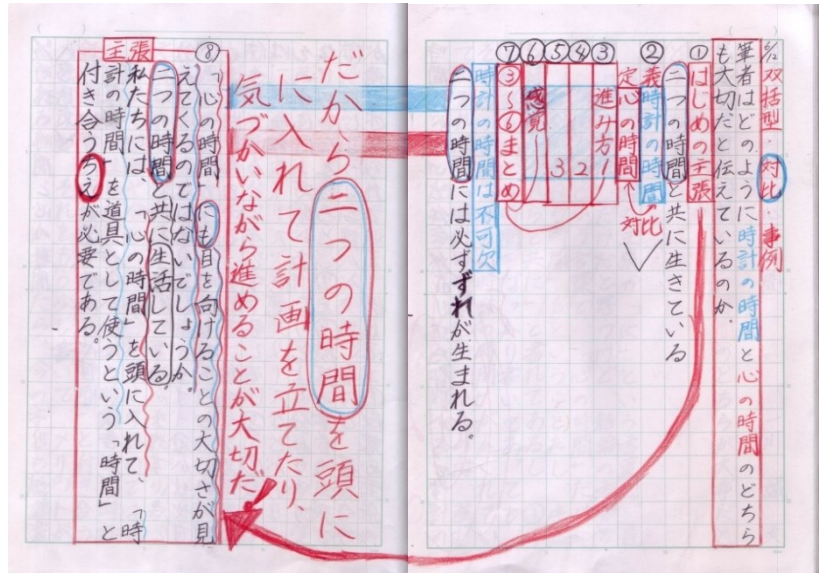


第2プロセス 問題の特徴づけと表現（解決のための見通し）

- 子どものつばやきを黒板にメモする。
 - ・「あれ？」⇒「どうして“あれ？”なの？」⇒ 子どもを問いに接近させることができる。
 - ・前半に出た言葉が問題解決に繋がったり、発展して考えたりするきっかけになる。
- 子どもの発言が、言葉足らずで不完全であっても、教師が言葉を足さない。
 - ・子どもに問い返すことで、子どもの考えが深まり整理される。それを他の子どもに繋ぐ。

第3プロセス 問題の解決（子どもが自分の考えをつくる）

- 各自の思考のあとが残るノート指導が大切。安易にワークシートを使わない。
 - ・ワークシートは作成した教師が考えているが、子どもは考えていない場合がある。
- ノートを書かせるのは時間がかかるとして、書かせることを避けたい。書かせないと、書く力はつかない。



第4プロセス 解決方法の共有（子どもの意見交流の仕方について）

- 子ども対教師の対話ではなく、子ども同士を繋ぐように教師は働きかけることが大切。
- 聴くことに価値を持たせる。
 - ・たとえ意見が言えなくても、聴いていれば答えられる問いかけをする。
「〇〇さんの考えをもう一度言ってくれる？」「〇〇さんの意見になるほどと思った？」
 - ・考えをつなぐ。「あなたの意見とどこが同じ？」「どこが違う？」
- 自分の意見を発表することがゴールではない。
 - ・友だち（教師ではない）に理解してもらうことがゴール。
「〇〇さんの考えがわかった人？」
 - ・助けてもらうことも大切にする。
「〇〇さんの考えを代わりに説明できる人？」
- 何に価値付けをするか。
 - ・正解ではなく、考え方を評価する。
「どうやって気づいたか」「どこを見たか」「何をやったのか」
 - ・各教科における「見方・考え方」を意識する。
- 解決方法の共有は、必ずしも授業の後半とは限らない。活動の途中でわかったことを交流することで、その中での気づきを生かせる場面を作ることができる。
- 「～しているはず」「～になっているはず」という言葉が出てきたら、その子は論理的に考えていると判断できる。そこを引き出す。
- グループ活動は、考えを深めるための手段で結論を1つにまとめない。あくまで自分の考えを持つための手段として捉える。



第5プロセス 問題の熟考と発展（さらなる気づき・活用）

- 身に付けた知識・技能を活用する学びを構築する。
- まとめでは、教師のまとめを写すのではなく、子ども自身が自分の学びを言葉でまとめる。
 - ・互いのまとめを共有する ⇒ 「それってどういうこと？」
- 子どもの言葉や思考過程が残る板書・ノートになっていることが大切。
 - ・思考のヒントを書いておく。
 - ・子どもの発言やちょっとしたアイデアを板書しておく。
 - ・板書を見れば答えがわかるのではなく、どうすれば答えが導けるかがわかる。

「個の考え」を育むためのノート指導例（3つの対話をもとに）

対象	内容（例）
物との対話 （自己との対話を含む） 〔主に第1～3プロセス〕	教材や資料等と対話し、個人の考えを構築する。ノートに思考を整理する。（個の確立）
人との対話 （仲間との対話） 〔主に第4プロセス〕	グループ活動や全体での共有。気づき・発見は、赤でメモする。
自己との対話 〔主に第5プロセス〕	仲間と対話した後、再度自己と対話して、考えの再構築を行う。赤で追記する。

この手立てを講じた場合、「赤」が多いほど、学校で友だちと一緒に学ぶ意義を実感させることができる。

ノート作り

~~=板書のコピー~~

=思考を深めるツール

Q7

日常的に授業改善に取り組むための工夫について教えてください。

教師の仕事の中心は、やはり「授業づくり」です。以下はその一例です。私たちは「学び続ける教師」＝「日常的に授業改善に取り組む教師」であることが必要です。

- 学ぶ機会を作る。
 - ・他者の授業を観て学ぶ。（公開研究授業への参加）
 - ・書籍を読んで学ぶ。（「ガイドブック2」の活用）
- 授業を分析する。
 - ・授業ビデオ、板書写真、子どものノート等の分析を行う。
 - ・同僚性を培い、板書や教材研究ノートを見合う、板書写真をサーバー機に入れて共有する。
- 進んで授業提案を行う。（授業を他者に開く）…校内でいつでも気軽に授業を見せ合う。指導案を作成するときは、「四日市モデルの5つのプロセス」を位置付ける。
- 研修用ノートを作る。…事項書の裏などにメモをするだけでは散逸するため、学んだことをノートに書いて残す。公開研究授業などの資料は、本当に必要なところだけをノートにスクラップするなどの方法がある。
- ミニ研修会を開く。…「参加自由」「出入り自由」「1時間以内」などの約束事を決めて、OJTで研修を行ったり、協働して教材研究を行ったりする。研究協議会での学びの共有にも有効である。



2学期のおすすめ研修会一覧

期 日	研修会名	講師	場所	備考
11/8(水)	中部西小学校公開授業研究会 (学びの一体化公開授業)	—	中部西小学校	H29 ガイドブック 活用推進協力校
11/10(金)	大谷台小学校公開授業研究会	三重大学 教授 守田 庸一	大谷台小学校	H29 ガイドブック 活用推進協力校
11/11(土)	学力向上・授業づくり研修 浜田小学校公開授業研究	三重学びのネットワーク東海諸教育学会 顧問 石井 順治 国学院大学 准教授 齋藤 智哉	浜田小学校	重点教育課題研修
11/14(火)	大池中学校公開授業研修会	愛知教育大学 教授 鈴木 健二	大池中学校	道徳教育総合支援事業 (指導課)
11/22(水)	小学校家庭科研修	三重大学 教授 吉本 敏子	塩浜小学校	教育支援課・研究協 議会共催研修
11/24(金)	桜台小学校公開授業研究会	三重大学 准教授 加納 岳拓	桜台小学校	H29 ガイドブック 活用推進協力校
11/25(土)	学力向上・授業づくり研修 三重北小学校公開授業研究	三重大学 教授 岡野 昇	三重北小学校	H29 大学連携実施校
12/2(土)	学力・体力向上・授業づくり研修 常磐小学校公開授業研究	三重大学 教授 岡野 昇	常磐小学校	H29 大学連携実施校
12/4(月)	塩浜中学校公開授業研究会(技術科)	(株)フォー・ネクスト 教育コンサルタント 大西 貞憲	塩浜中学校	H29 ガイドブック 活用推進協力校
12/6(水)	食教育研修	管理栄養士 公認スポーツ栄養士 櫻井 智美	常磐小学校	教育支援課・研究協 議会共催研修
12/6(水)	中学校数学科研修	教育アドバイザー 坂倉 傳二	四日市市勤労者・市民交流 センター東館3階大会議室	教育支援課・研究協 議会共催研修

Q8 研究授業「事後研修会」持ち方のアイデア例について教えてください。

KJ法

三重県出身の文化人類学者の川喜田二郎がデータをまとめるために考案した手法です（KJは考案者のイニシャル）。



まずは、参観者個人が感じた授業の「良かった点」と「課題」を色の異なる2色の付箋に書き込みます。

次に、班の中で付箋の内容を紹介しながら模造紙に貼り付けます。このとき、関連した意見をグルーピングしながら、四日市モデル5つのプロセスに沿って整理すると、論点を焦点化しやすいです。

模造紙をまとめたら、「ひと班ずつ発表して拍手する」よりも、例えば、「第1・2プロセス」「第3・4プロセス」「第5プロセス」ごとに、複数の班で出た意見を関連させながら、自由発言（全員発言）することで、論点が絞られ、深めることができます。

パネルディスカッション

1つのテーマについて、複数の討論者が公開で協議を行う討論会の1つの手法です。ガイドブック活用推進協力校による実践発表時、この手法で行いました。

まずは、話題提供を行う司会役のコーディネーター1人と、討論を行うパネリストを3～5人を決めます。

コーディネーターが、提案授業が校内研修主題に迫っていたか〔例えば、解決への見通し（第2プロセス）は適切であったか、そこへ至るまでの第1プロセスでは、子どもが自ら問いを持つ課題提示ができていたか等〕を問いかけ、パネリストは各自の授業分析をもとに、提案授業の成果と課題について討議します。コーディネーターは、パネリスト同士のやり取りがひと段落したところで、参観者からも意見を求めることができます。参観者は、パネルディスカッションを受け身で聴くのではなく、コーディネーターから意見を求められたとき、即座に意見を述べられるように備える必要があります。



～同僚性を発揮しつつ、授業改善に取り組もう！～

〔お知らせ〕 11/1 筑波大学附属小学校教諭 大野桂先生示範授業・講演会の貸出DVDがあります。ご希望の学校は、研修・研究グループまで

教育支援課 特別支援教育・相談グループより

校内支援体制の充実にに向けた取り組み

特別な教育的支援が必要な子どもが、学校生活を安心してスタートできるよう、途切れのない支援に向けた取り組みが、各校で進められています。

◆小学校生活スタート支援事業

通常の学級に就学予定で教育的配慮が必要な子どもについて、小学校が主体となり、早期から幼稚園・保育園・こども園と連携しています。

モデル校（平成29年度9校）には、非常勤講師を配置して校内 Co.の活動時間を保障するとともに、地域特別支援教育 Co.協力員を派遣して見立てや支援について助言しています。

◆特別支援教育 Co. の実地研修

小学校の校内 Co.は、就学相談担当者の園児観察に同行して、子どもの見立てや小学校でできる支援について学びます。

中学校の校内 Co.は、中学校入学後に支援を必要とする小学校6年生の児童観察を行います。地域 Co.協力員から子どもの見立てや中学校でできる支援について学びます。

◆小学校校内通級〈サポートルーム〉支援事業

今年度から、小学校のモデル校で、週1時間程度の校内通級指導を行っています。（指導時間の保障に非常勤講師を配置）今後も、毎年5校ずつモデル校を指定し、4年間で校内通級が20校で実施できるようにしていきます。

【サポートルーム担当の声】

撥音や拗音などの特殊音節が定着しにくい子や、学習姿勢が崩れやすい子に、サポートルーム貸与教材を使って指導しています。ことば絵カードや早口ことばを用いたり、ゲーム形式で活動させたり、体を安定させるクッションを椅子の上に置いて良い姿勢を体感させたりして、成功体験が積み上がるよう工夫しています。サポートルームでの勉強をととても楽しみにしてくるので、「次はこんなことをしてみよう」と指導を考える励みになります。

【貸与教材】





不登校相談の現場から（保護者と学校との関係について）

不登校相談では、しばしば保護者の方から学校の不満が聞かれることがあります。保護者も学校も、同じように「子どものために」取り組んでいるにも関わらず、なぜこんなことが起こるのでしょうか？



「ボタンのかけ違い」が起きていませんか？

不登校には様々な要因がありますが、まずきっかけを探ることから、取り組みがはじまります。

① きっかけの事象は丁寧に紐解きましょう。

その子どもにとっては、どんなことでも大きな問題です。不登校のきっかけと不登校の要因が同じ場合には、この初期対応で不登校を予防できます。

② 一方的な相談対応にならないことが大切です。

学校に行きづらくなった場合には、保護者・本人とよく話し合い、合意形成を図りましょう。

話し合いが、学校からの「〇〇してください」という一方的な相談対応になると、保護者や本人と思いや方法がずれてしまういわゆる「ボタンのかけ違い」が起きやすくなります。

「ボタンのかけ違い」が起きないように、日時・回数、行うことなどを具体的に確認することが大切です。



③ 支援の見通しや、見直しの時期を一緒に考えておきましょう。

不登校になってしまった場合は、今後の見通しが利かなくなることで、本人も保護者も不安になります。具体的な支援の見通しを一緒に考えておくことや、見直しの時期を考えておくことが必要です

子どもの様態や特性をしっかりと理解し、保護者と協力して必要な支援を行っていきましょう。

